

京町家と金属作品の親和性

大阪芸術大学 工芸学科 教授 長谷川政弘

今年度の研究課題は「京町家と金属作品の親和性」とし、私自身が制作した金属作品を二つの異なったタイプの京町家に展示して金属作品との親和性を検証するというものであった。しかし新型コロナウイルス感染拡大によって検証する場である旧お茶屋の「祇をん小西」（ガラス作家の山本佳子氏との二人展6月開催予定）と旧木崎呉服店「The Terminal KYOTO」（11月個展予定）での展示が来年度の延期となった。そこで今年度は、この二つの京町家の考察と作品の展示計画、そして作品の試作を行うことに絞った。

「祇をん小西」について

京都の有名なお茶屋街である花見小路通りに面するこの建物は、大正時代に建てられたもので、築100年くらいになるという。場所柄お茶屋などの商いを前提に建てられた京町家で、敷地は間口約7.2m、奥行きは20mほどの広さである。

オーナーである小西いく子さんの三代前のキクさんが、川端四条で明治時代後半にお茶屋を始め、大正時代にこの地に越してきたと聞いた。そして昭和25年まで、ここでお茶屋を営んでいたという話だが、四代目の現オーナーが平成10年からこの家屋で画廊を開業した。現在も内部外部ともにお茶屋の時代とほぼ変わらない状態が保たれている。

玄関の土間から3畳間のお客さんを迎える部屋がある。その奥に6畳間があり、ここは主に芸妓さんが簡単な身繕いをした部屋らしい。その部屋から左側に6畳間、8畳間の座敷と部屋が続く。もちろんこの二つの部屋は襖を取り外せば広間となる。その奥に2坪ほどの坪庭があり、渡り廊下を渡って行くと4畳半の離れと続く構造となっている。お座敷遊びは主に2階で行われていたらしい。

山本氏と二度ここを訪れて部屋の広さや構造を確認した。この空間の歴史的な背景も考慮に入れ二人でアイデアを持ち寄り小作品以外は全て二人のコラボレーション作品とすることに決めた。展示会のタイトルは「水景 waterscape」とした。私の長年のモチーフの蓮と山本氏の植物を連想させる透明感あるガラスのオブジェから水を感じさせる空間を創造しようという考えでまとまった。6月になるとここは夏座敷のしつらいとなり畳の上には全面あじろが敷かれ、涼を演出する空間になる。

最初の3畳間の展示は来場者を迎えるだけの空間として展示はしない。奥の6畳間は、私の鉄でできた蓮の蕾数本を横たわらせる。その中に一茎のガラスの蕾を忍ばせる。この部屋は舞妓さんが控えの間として使った部屋と聞きこのアイデアが沸いた。

次の6畳間と8畳間は一つの空間として捉えて私の鉄の蓮の葉と山本氏の蓮花をモチーフにしたガラス作品を交えたダイナミックなインスタレーションを展開し視覚的に夏を謳歌する水辺（蓮池）の風景を連想させたい。

一番奥の4畳半は少し秘めた空間として位置付けた。水を思わせる透明ガラスオブジェを天井からたくさん吊るす。それを受けるかのように直径1.5メートルのポリッシュされた鉄製の蓮の葉を中央に配置しする。

照明はできる限り照度を落として金属の光沢とガラスの反射を利用して透明感を演出する。以上が祇園小西での展示計画である。

「The Terminal KYOTO」について

もう一つの検証の場の京町家は、下京区岩戸山町に木崎安之助氏が呉服屋と住居のために昭和7年に建築したもので

ある。京町家の建築技術は昭和初期に最高潮を迎えたと言われている。この近辺は古くから呉服屋などが多く点在する地域で祇園祭の山鉾町としても有名な場所でもある。間口約9m奥行き50mというまさに「うなぎの寝床」と呼ばれる深い奥行きを持った典型的な大商家の敷地である。

施主の木崎氏は相当高い教養を持っていたらしくそれが茶室の作りや天井の作り、部屋の細部へのこだわりで現れている。呉服屋の看板を下ろした後は住居として使われていたが、その後空き家となっていたところ京都出身の企業家が京都の町家文化を守るべく立ち上がり、商業用にリノベーションするのではなく「本来の姿に戻す」をコンセプトに平成25年9月から修復工事を始め、平成26年3月には一般公開に至った。ここを文化発信のターミナルとし作品展示の場所として現在活用している。

展示については私がこれまでに制作してきた蓮のシリーズを中心に家屋全体に作品を配置し、それに加えて協力作家のミニマルアート（平面作品）を所々に散りばめるのが基本プランである。ここでは全てを記述しきれないので主だった場所の作品を上げていく。

まず1階の入り口の広い土間には来場者をつかむために2mを超える大きさの鉄製の巨大アリを設置、坪庭には直径1.8mの銀色に輝く蓮の葉を2枚、床の間にはブロンズ製の活花風の蓮の花托、壁には協力作家のミニマルな版画を配置する。

2階の板の間の吹き抜け空間には、直径1mの花托と空間全体に種子を浮遊させる。8畳間と10畳間は、一つの空間として鉄製の蓮葉や花、花托など取り混ぜた蓮池を思わせるインスタレーション「暝色の庭」を展示する。今のところの展示計画は以上だが細かなことはこれからの詰めが必要となってくる。

作品の試作について

今回の作品の主な使用金属は鉄とした。和空間に鉄は今までの展示経験から相性は良い。昔から囲炉裏や茶釜、燭台などの鉄製品は和空間に自然と馴染んでいる。

まずは蓮の蕾の試作を行った。これは「祇をん小西」の展示で、来場者が最初に目にすることになる作品である。蕾は以前にも制作したことのあるモチーフだが、今回はこれまでの表現からもう一步踏み込んだ表現の必要性を感じた。実際に蕾を入手して分解し蕾の内部構造を観察した。最終的に見えるのは表面だけなのだが作品自体の内面性も深めるために、ある程度の花びらの重なりは必要である。見えない部分をどこまで作り込むかという見極めも必要である。今回の試作から鉄板の厚さは1mmから1.2mmが最適だということがわかった。花びらを表現するにあたって材料の鉄板の厚みの選択は重要である。そして蕾と茎の関係も重要なポイントである。異なった形がつながる接点は、造形的視点からして見せ場でもある。ここでは単なる鉄同士の溶接ではなく真鍮鍍を使用して真鍮色をアクセントとして視覚的效果も狙うことにした。

他は蓮葉の鉄板の厚みの見直し、自作の制作工具の検討も行った。

今年度はコロナ禍において様々な制限もあり研究は計画通りには進展せずここまでで終了した。次年度も引き続きこの研究テーマを継続して行い、作品制作や展示を実践して京町家と金属作品の親和性を検証していきたいと思う。